

世界宗教博物館における世界宗教紹介

— 宗教教育参考資料として —

人文学部 教育・臨床心理学科 教授 大久保 正 廣

はじめに

近年、キリスト教やイスラム教をはじめとする宗教対立の問題が拡大し、戦争とテロの脅威の中、グローバル化した世界の中でさらに相互の宗教理解の必要性が高まっている。日本を振り返っても、20年ほど前の衝撃的なオーム真理教の事件はまだ鮮明な記憶として残っているが、それを宗教教育に関連する問題としてとらえ、具体的な教育実践とするところまでには一般的にはまだ至ってはいない。こうしたいわゆるカルト宗教にまつわる事件等への対応は、特に大学教育とも関わる長年の大きな課題であり続けたが、学校教育における問題意識の共有そのものがあいまいなままに流されてきたように思われる。今日の世界的な状況を踏まえつつ、より具体的な宗教教育実践へとつなげていく理念と方法が課題となっている¹。

今日の初等中等教育における宗教教育においては、2006年の教育基本法改正において「宗教に関する一般的な教養」を教育上尊重することが追加された。それに合わせて例えば中学校の新学習指導要領社会科においても「宗教」の語は1から7に増え、「宗教にかかわる知識を増やそうという意図が看取できる」²。しかしながら、これまでの日本の公教育においては、社会科等の知識以外では、宗教はこれまでほとんど取り上げられてはこなかったし、戦前の国家神道が大きな問題となった戦後の流れのなかで、特に学校教育においては宗教そのものがタブーでさえあった。こうした経緯を踏まえつつ、宗教教育における今日的課題への取組は、学校教育実践においても避けては通れないものとなっている。

こうした課題解決への実践的な取り組みとして、大学の講義において、拙いながらも筆者は宗教知識理解と研鑽のために学生による宗教に関するレポート発表を試みている。内容としては、キリスト教、イスラム教、仏教をはじめ、神道、ヒンズー教など様々な世界の宗教から自分の興味あるものを選択して自分なりのやりかたで発表し、相互に意見交換するというものである。まずは、初歩的なものである知識教育から入るというのが筋であろうと考えているが、より効果的な教育方法の理論的検

討は改めて今後の課題としたい。ここではとりあえず、宗教的知識教育の基礎をいかに提示するのか、その教材のありかたの検討から始めたい。

世界宗教博物館

さて、より広く一般を対象にこうした課題に取り組んだ事例として、ここでは、台湾の新北市にある世界宗教博物館における世界宗教に関する世界宗教紹介文を取り上げる。この画期的な博物館は宗教をテーマとした世界初めての試みであり、心道法師³の発案によって創設され1994年から収集されたものが展示、保管されている。

設立の趣旨としては、「あらゆる人種や宗教への尊重を促進し、それによって、現代社会において複雑化の度合いを増している様々な問題に対処しようとする」とあり、「個々の伝統の貴重な遺産を大切にするとともに、それぞれが持つ私たちが教え導く計り知れない価値に、より深く気づくことができる」としている。また、そのような目的を達成するための独自の方法については、「世界の主要な宗教が発展させてきた芸術表現や文献や経典、音楽、宗教儀礼や特色ある建築などを鑑賞することで、個人的あるいは文化的に、新たな経験の扉を開くことができる」としている。そして、このような一体化された体験によって、世界の人々が「共に世界平和と人類の福祉の向上に努める場となり」、「人類共通の真理・信念を呼び覚ますことを大切にするとともに、それぞれの信仰と伝統が持つ唯一無二の価値」を称える「人類の持つ霊性の博物館」となることを志向している⁴。

世界初の宗教博物館として画期的なものであり、混乱した世界的な現状をいくらかでも打開するうえでのひとつの世界的にも貴重な実践である。とりわけ、基本的な宗教的知識さえもこれまでほとんど取り上げられてはこなかった日本の学校教育を考えると、この博物館の試みは少なからぬ参考となるはずである。そこで、ここでは本館の7階にある世界宗教展示大ホールにある世界宗教の説明パンフレット（繁体中国語）を資料として、キリスト教、イスラム教、仏教、道教、ヒンズー教、シーク教、ユダヤ教、神道教、エジプトの宗教、マヤの宗教

といった世界的な10種類の宗教に関する紹介文を提示したい⁵。

宗教紹介パンフレット(原文：繁体中国語)

キリスト教

キリスト教は3つの主要な宗派 — ローマカトリック教会、東方正教会、プロテスタント諸教会 — からなっている。この3宗派はそうはいっても歴史的には全く別々な発展をしてきているが、キリスト教の初めはすべてイエス・キリストの誕生に遡り、福音や、受難および復活を伝えた。我々は、キリスト教と認識するとか信仰するとか気にしてはいないが、誰もがイエスに関わる事柄に接しており、例えばイエスの生誕を祝賀するクリスマスや西暦の使用のように、実際はイエスの誕生を年代の基礎としている。このように、キリスト教的な精神と文化は西洋文明と芸術的伝統に受け継がれ、私たちにとって既に見慣れない宗教信仰ではない。

イエスは、紀元前4年ごろにユダヤ人として生まれ、我々はイエスについて聖書によって知ることができるが、イエスの生活や取り上げるべき事柄は多くはなく、主な内容はイエスが30歳の時に教導や治療をはじめたころに集中し、33歳で罪人として十字架上で処刑されるまでである。この伝道の短い神がかり的な3年間に、特に重要な12人の門徒が彼に従い、そしてイエスの受難後もその教えを伝え続けた。キリスト教ではイエスはただの説教師ではなく神の使いであり、神の子と称され、神性が備わり、その神性は受難後の復活にはっきりと現れ、イエスの復活信仰は教会を作り、門徒は次々に洗礼を受け、治療とイエスの復活という噂によってキリストの時代が始まった。

キリスト教は300年もの長い間地下組織であったが、このころ特に多くのキリスト教徒が殉教した。ずっと4世紀になってローマのコンスタンティヌス皇帝が、キリスト教を合法化して後には、このキリスト教は西洋文明、歴史、芸術および生活において重要な位置を占めるに至った。キリスト教は歴史上二度の分裂を経ており、最初の発生は11世紀であり、ローマ帝国が東と西の両帝国に分裂してキリスト教は二つの教会を中心に、つまりビザンチンとローマに分かれた。東と西の教会の紛争は帝国分裂後もずっと続き、1054年になって東方正教会はローマ教会を離脱し、現在の東方正教会の主な区域はギリシャ、ロシア、東欧等の国家である。二回目の分裂は、16世紀の時代であり、ヨーロッパ各地でローマカトリック教会への宗教改革が始まり、プロテスタント諸教会は

宗教改革後に形成された各宗派の総称となって、非常に多くの新興教派となって今日に至っている。

イスラム教

7世紀に、イスラム教はアラビア半島の西側で興り、急速に中東地域全体に伝播し、現在では世界の2大宗教となっている。ムスリムの信仰は、610年にもとは商人であるムハンマド・イブン・アブドゥラーフによって始まった。彼は40歳の時に天使ガブリエルの声を聞き、神の啓示をうけて、人々を集めてイスラム教を伝道した。アラビア語のイスラムは、唯一無二の創造者と宇宙万物の主宰の下の「謙遜」あるいは「屈服」を示す。632年、ムハンマドが死去する時に、アラビア半島の大部分の地区は、イスラムの統括するところとなり、政治、経済、宗教の三方面で共に治めることとなった。ムハンマドが、アラーの神の啓示を受けて後、その啓示は集成され経典となって、コーランとなった。ムハンマドはアラーの神の選ばれた使徒であり、最初で最も権威あるコーランの説教者である。この経典は神が人類に与えられた最終的で最良の根本的指南であるとされている。ムスリムによれば、イスラム教には長い歴史があり、そのなかでもムハンマドこそが最も重要な人物であり、唯一最後の予言者であり、「預言者の封印」と称されている。

ムスリムの宗教儀式の中で、最も重要なのはイスラム教の「信仰の柱」であり、イスラム教の五行である。

- 第1の柱は、以下の言葉を厳粛に吟ずる「我は証言する：万物は主ならず、アラーの神のみが唯一の神：ムハンマドはその使者なり」これは全体的なアラーの神への信仰証明である。
- 第2の柱は、礼拝の儀式に関わり、普通夜明け、正午、昼下がり、日没及び夜に、毎日5回祈りを捧げ、その儀式の前には手を清浄にする。
- 第3の柱は、お布施である。ムスリムは必ず毎年余ったものの中からいくらかの財を寄付せねばならない(約2.5パーセント)。困窮者や助けが必要な人の支援である。
- 第4の柱は、イスラム歴の中の九月にある断食である。月のある期間に、主として預言者ムハンマドが神の啓示であるコーランを受けたことを祝賀するものである。
- 第5のイスラム教信仰の柱は、メッカ巡礼である。ムスリムは一生のうちいずれかの時に、皆少なくとも一回は必ずこれをしなければならない。

ムスリムは信仰を完全に生活の中に取り入れており、簡潔に述べると、イスラム教の五行は信徒の生活原則である。

仏教

仏教は、紀元前6世紀に生まれたインドの一人の王子シッダールタ・ゴータマによって創始された。彼の一生は神話的な色彩に満ちている。つまり、ルンビニでその王妃である母のマヤ夫人の右脇から出生し、7歩進むと、歩むごとに蓮の花びらが開き、シッダールタは手を挙げて、「天上天下、唯我独尊」と語ったという。母后が早く亡くなったので、シッダールタ王子は叔母の養育によって成人し、宮廷の中で保護された生活を送った。長じると、4度の外出の機会を得て、シッダールタは衰弱した老人や病人の苦痛や凄惨な死体と修行者が真理を求める姿を見て大変驚き、人生の様々な苦と無常を体験し、毅然として出家して修行し、解脱の方法を思索し、最後は悟りを開いて成仏し、後には釈迦牟尼（釈迦族の聖人）と称された。釈迦牟尼仏は在世の時、人々が彼を敬慕して近くに来て、彼に向って「あなたはどなたですか」と聞いたとき、彼はすぐに答えて「私は悟りを開いた人です」といったことで、我々は仏陀を釈迦牟尼仏と尊称している。仏陀は、つまり「悟りを開いた人」である。仏陀は一生インド各地を行脚し、法を伝え、80歳の高齢で入滅した。

以後仏教はインドから外部に伝わり、主に三つの経路によって伝播した。つまり、南伝仏教はスリランカを経て東南アジア一帯、ミャンマー、タイ、カンボジア、ラオス、等に伝わり、原始仏教的な色彩を強く残し、北伝仏教は中央アジアを経て中国、韓国、日本に伝わり、また東伝仏教とも称される。藏伝仏教はチベットに伝わり、多くヒンズー教の影響を受け、その地の文化と結合して、ひとつの特殊な仏教流派を形成した。

初期の仏教は偶像を崇めず、造形をすることはなかったが、多くは抽象的象徴の意味合いで仏陀は伝わり、例えば仏足印に代表されるように各地に伝わった。宝座が仏陀の説法を象徴するように、菩提樹は仏陀涅槃等の象徴となっている。

アレキサンダー大帝の建国により、ギリシャはギリシャ的彫塑を世界に広め中央アジアを経て、インド北部に伝わり、インド北部のガンダーラ地区では、ギリシャ彫刻の影響を受け、仏陀像が造られはじめた。展示品の「仏陀誕生のレリーフ」は、ガンダーラ芸術であり、仏陀誕生時の一場面を描いている。この仏陀誕生のレリーフは、釈迦牟尼仏の母后のマヤ夫人の彫の深い高い鼻の像であり、ギリシャ彫刻の影響を今に伝えている。レリーフはマヤ夫人の懐妊を描いており、マヤ夫人がアショカ樹の花に手を伸ばしたところ、仏陀は彼女の右脇から生まれたというその時の様子が詳しく生き生きと描かれ

ている。

道教

道教は中国に起こり、その淵源は古く、その歴史は約紀元前6世紀の老子の生活に遡ることができる。その後二つの流れに発展し、人文学派的道家と宗教的な道教となった。道教は老子と荘子その他道家の著作によって思想の基礎があるが、陰陽家や神仙家及びその周りの精神的資源を吸収し、東漢末（2世紀）に宗教としての形を整えた。道教は加持祈祷や煉丹術及び生命修養的な宗教実践活動を通して最高の精神 — つまり道に至るものである。

道教には歴史上非常に多くの宗派があり、東漢時代(25年から220年)には、『道德経』を主要な経典とする天師道と『太平経』を受けた啓発的な太平道が民間で活躍した。南北朝時代（5世紀から6世紀末）には上清と靈宝派があり、上清派は『大洞真経』と『黄庭経』を崇拜し、存想法を主要な修行法とし、靈宝派は、『靈宝経』を主な経典とし、儀式を重んじ、府籙科教と功德修養を旨とした。

宋の時代（10世紀初めから14世紀末）になって、更に正一、全真、大道等の勢力が興った。正一教は道教の師である張陵の後継ぎを指導者とし、『正一経』を経典とし、主な法術はお札と懺悔による祈願である。全真教は、清浄無為、生命修練を法とし、出家修行をして仙人となり道を明らかにする、豊富な教義や制度的体系があった。大道つまり真大道教は、『道德経』を経典とし、発展して通俗の倫理や信条となり、実践道德の規範となり、同時に祈祷によって病気を治し鬼神を払うとされた。ただ、今日に至っては、影響力のある教派は正一教と全真教である。この他には、絶え間なく現れる民間の道教もある。

宗教で共通するように、道教も苦しみを取り除き世を救うことを重んじるが、ただ道教は個人の宗教的実践を重視し、修行して得道し世俗を超えた仙人こそが、人と社会を救うことができるとしている。道教は「道」という文字の持つ意義の広がり — 老子と道教の神々道教宮觀 道蔵 煉丹の術と治療 五行と八卦等六角の切入 — がある。以上が道教の複雑な内容と教義の簡単な紹介である。

ヒンズー教

インド文明は人類の四大文明のひとつであり、本館の展示している世界の10大宗教のなかで、インドの地区か

ら発生した宗教には、ヒンズー教、仏教、及びシーク教があり、この三つの宗教はそれぞれインド文明と関係がある。現在私たちがヒンズー教と知っているのも、多くはインド人の信仰する宗教であって、ヒンズー教の歴史を遡れば、明確な創立の時期と創始者ははっきりせず、アーリア人が早くからインドに定住して後、自然崇拝信仰から次第に発展した。早期のヒンズー教は「ベダ教」といわれ、《ベダ》はヒンズー教の根本的経典とされ神の知識や神学に関するものである。ヒンズー教はただの宗教ではなく、インド人の生活様式であり、正統的な語り、思想及び行為の実践がわずかに神に至るものとみなされ、インド人の生活の中に生きる宗教である。

ヒンズー教には膨大な神の系統があり、インドの史書の記載では、三億三千万の神があり、彼らが信じる神がどれくらいかにはこだわらず、彼らは皆ブラフマンによって化身となり、ブラフマンは一切の生物の根源であり基礎であり、すべてに存在し、またすべてを超越した精神であるとする。ヒンズー教徒は、皆個人は業(カルマ)を持って止むことのない輪廻をめぐり、身と心及び宗教儀礼を修めることで、わずかに生死と輪廻を超越することができ、梵我合一の境涯に到達できる。インドでは特に神事に多いのが、神像を祭礼の儀式的後に河に棄てたり、或いは直接神像を壊すことである。これは、インド人の崇拝とは、神像そのものにあるのではなく、神像にこめられた本質を崇拝することにあるためである。ヒンズー教は特に神が多いが、主に三大主神を崇め、創造の神「ブラフマー」宇宙維持の神「ビシュヌ」宇宙破壊の神「シバ」がある。

三大主神の中でも、ビシュヌとシバの信仰は最も盛んで、シバの形象は特殊であり、長髪の頭で、額の上に第3の目があり、手には三又の鉾を持っており、破滅の舞を跳ね踊っているものもあり、ビシュヌ神は手にチャクラ(円盤状の武器)とホラ貝及び棍棒を持っている。伝統的なヒンズー教の信仰では、宇宙というものは生き生きと休むことなく循環して終わることがない。宇宙がブラフマーによって創造されて、世界は同時に進行したが、その後世界は壊滅し、宇宙を維持する神ビシュヌ神が修復した。しかし、宇宙の破壊がそれほどでもない時には、シバ神はその破壊の本性を発揮して宇宙を壊滅し、その後ブラフマーによってまた新たな宇宙が創造される。だからヒンズー教では、シバ神は破壊のみならず再生をも象徴し、男性性器に似せて、その生産的な生命力を表現している。

シーク教

シーク教の創始者は導師ナーナク。1469年に、インドに生まれ、クシャトリア階級のインド人であり、彼が成長したのは二つの宗教文化が接触した環境の中で、ナーナク導師は、ヒンズー教の伝統を重視し、またイスラミ的な崇高性を認めたが、当時の環境の中で、この二つの宗教はねたみあい殺し合っていた。ナーナクは川で沐浴している時、神秘的な失踪をし、三日後にまた川に現れ、そして川辺に集まっている人々に対して語った。「ここにはヒンズー教もイスラム教もない、我々は誰の道につき従ったがよいのか。私は神の道に従ってゆきたいと思っている。神は既にヒンズー教にもイスラム教にもなく、私がつき従うのはこの神の道である。」ナーナク導師は、この三日間の失踪は神の神殿に導かれたと解釈している。

シーク教は、ヒンズー教の生命は輪廻という教えを保っているが、イスラム教が至高のものでありこれ以上のものはない唯一の神であるという信仰をもっており、生きる目的は輪廻を断ちきって、神と合一することにあるとして、人の苦難は神と分離して創造されたことにあり、ただ導師の教導と神の名を唱えて瞑想しさらに実践と善行によってのみ輪廻から解脱できるとし、善行はシーク教の必要条件のひとつである。導師(グル)はシーク教にあっては、無知と暗黒を取り払うものであり、ナーナク導師から第10代ゴービンド導師の死にいたる、合わせて10代の導師が信仰の核心となり崇敬されている。神聖なシーク教の原経典は『アーディー・グラント』で11代の導師からは人間とみなされ、原経典はそれまでの歴代の導師の言葉から編纂されている。経文の内容は大部分が詩篇と讃歌であり、導師の内心における神との瞑想であり、自分でのみ詠じた歌ではない。

第10代のゴービンド・シン導師はシーク教で最も影響を与えた導師であり、ただ原経典によって導師の地位を確立したばかりでなく、また、カールサー教団を創立し、これによってシーク教は明確な形となり、また新たなシーク教の組織と教義を整えた。カールサーに入会する時の儀式では人は5つの品物を持ち、「5K」と称す。5Kとは、ケーシュ(長髪・髭)：神の意志を受け入れる・カンガー(櫛)：容儀的な注意と節制心(普通シク教徒は長髪に櫛をつける)・クリパーン(懐剣)：真理を保持する意志・カラー(腕輪)：神と導師への忠誠と教徒の団結・カッチュ(短い袴)：道徳的力量のことである。入会の儀式の後、男性信者の名前にはシン(つまりライオンの意思：壮健で勇敢)、女性信者にはコウル(女王)をつけることになっている。

ユダヤ教

ユダヤ教の起源は4000年前の近東地区であり、長い間の変遷と発展の中でも、基本的な信仰の核心は、古き伝統を維持し変わらないということである。台湾では、ユダヤ教と接する機会は多くはないが、ユダヤ人の故事に関することは、いくらかはなじみがある。例えば、神が世界を創造した人類の初めての祖先がアダムとイブ、エジプトからユダヤ民族を救ったモーゼ、戦いの偉大な王大ダビデ、時を超えた智慧の王ソロモン。これらの事柄はユダヤ人の神聖な経典の中に記載され、4000年以上も前にユダヤ人の祖先アブラハムが神と契約し、これによって一神教の信仰が、ユダヤ民族の宗教となった。

「主はあなた方を自分の民として選んだ」（申命記7：6）、これはユダヤ教の経典の経文の一部であるが、叙述では、ユダヤ人と神との特殊な契約関係つまり「選民」を意味している。1100年もの間ユダヤ民族は世界各地を流浪し、さらに第2次大戦では虐殺の苦難にあった。悲痛な民族的な運命の中で、ユダヤ人と神との契約つまり選民の観念は、ユダヤ教が継続し伝わる力となったのだろうか。この問題の答は容易ではない。その数の少なさにも関わらず、彼らの人類の文明に対しての貢献度は高く、おそらく、これはユダヤ人の優れた智慧によるものである。

ユダヤ教は一種の生活様式であり、一種の信仰というだけではない。一般には、ユダヤ教の偉大な四つの精神は、信仰と儀式と文化そして民族に及ぶが、およそユダヤ人的な生活習慣や生活規範及び民族祭日はすべて「神」に関連し、ユダヤ人は伝統にのっとった生活をし、彼らのなすところはユダヤ教の主な道標であり、この行動規範は神聖な経典であるトーラによっている。

トーラは、ヘブライ語で方向や教えを指し、ユダヤ教の最も早期の律法は神がシナイ山でモーゼに啓示した「十戒」であり、ユダヤ人の道徳生活の最も基本的な原則であって、「十戒」の他、「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」に、613条の戒律や、戒律的な内容及びユダヤ人の社会生活の各方面に向けたものがある。トーラの生活律法は、ユダヤ人の生活の中で神聖であり、生命誕生時の割礼や食物への特殊な礼節、結婚時の制約等、皆神聖な領域として大切にされている。

神道教

「神道」つまり「神の道」は、日本の伝統的な信仰である。「神道」の二文字はもともと中国の漢字であるが、ただ、中国と日本のこの言葉の概念は同じではない。日

本の「神」はKamiであり、神道教の祭る神は中国という神祇とは少し違って、人類、鳥獣、樹木、草花、山川、海洋すべてが神であって、さらに少しはなはだしいものに至っては、人の恐れる邪悪で神秘的な事物もまた神と称している。つまり簡潔に述べると、日本のいわゆる「八百万の神」は、平凡なものではなく、卓越し人の心に畏敬の念を起こさせるものすべてこれを神と称している。

今日の神道の基礎は、数千年前の日本の有史以前に遡るが、最も古い神道の神話は、『古事記』と『日本書紀』の二書に記されており、約8世紀初頭に完成した。『古事記』の記載によれば、日本の形成はイザナキとイザナミの両神が「この漂っている国土を繕い固定しなさい」という大神の命を受けたことによる。イザナキの神は玉矛を賜って海に挿し入れかきまわし引き上げると、その矛先から滴りおちる塩水が凝結して最初の島が形成され、両神は結婚して、風、樹、山、火等の神々のほか、日本のその他の島々も生んだ。日本を「神国」と称するのはこの神話によるものである。

天照大御神は神道神話の中で最も重要な女神であり、伊勢神宮に祭られさらには広く日本全国の神社に分祀されており、日本最初の天皇である神武天皇は天照大御神の子孫であるとされている。日本人もまた神社の祭りで儀式を行い、神社は一年中様々な時節の祭事によって家庭における個人のありかたを示し、神社の社会における重要性を表している。

神道教はそのうえ歴史的に偶像崇拜や神聖な経文や系統的な教義を強調しないが、このことは互いがいつも共同の価値観と生活様式を抱いており、神話と宗教儀式だけで信徒のつながりが維持されてきたことを意味している。神道の最も重要な観念は「清浄」であり、人の本性は善良であり、ただ汚辱を祓い去ることで、生まれつき備わっている善良さが露見できる。だから、神道的な儀式が尊ぶところは、純粹で清らかな自然に回帰することであり、神の初めて造化した人と事物のあり方に戻ることである。同時に、多くの神々が自然の中に存在するのを認め、人と自然もまた調和し好ましい関係を築く必要があるとする。

古代エジプト

古代エジプトの歴史については、19世紀以前にはほとんど知られていなかった。近年のいわゆる「エジプト学」は、フランス人によって開始された。1798年にフランスの軍事家が軍を率いてエジプトに侵入し、学者達がエジ

プトと文化の歴史を探求するきっかけとなった。1821年に、一人の学識豊かな学者が「ロゼッタ・ストーン」の象形文字を初めて解読したが、この学者が「エジプト学」の創始者であるシャンポリンである（ジャン＝フランソワ・シャンポリン）。この後、エジプトの古い碑文やその他の象形文字は、20年もかからず解読され、エジプト学が成立した。

エジプトとその文明は紀元前3100年に始まり、上下エジプト統一後、3000年近くの時空をこえて、30数代のファラオの統治を経た。エジプト人の宗教信仰は多神教であり、ほとんど地方によって小さな神を主に崇拝していたが、ただ太陽神への特別な崇敬は、まだエジプト全土に遍在していた。

エジプト的な神話や故事は豊富であり、そのなかでもオシリスの神話は、エジプト的宗教の主軸である。オシリス信仰は、古代王国がまだ形成されない頃、最初はプシリスという地方の神となり、新王国が建てられると全エジプトの主要な神となった。オシリスはイシスと結婚し、ホルスを生んだが、破壊の神セトの謀略で死んだ。伝説ではセトはオシリスの死体を14の塊に切って、世界の様々な地方に分けて埋めたが、幸いにもイシスが遺体を探し出し、新たにひとつのミイラを作って復活した。復活の後、死者の神を審判することとなり、亡霊の保護者となった。審判の過程はいわゆる「天秤の儀式」である。審判の場にひとつの天秤を置き、一端にマアトの羽毛（正義の化身）を置き、もう一端には死者の心臓を置き、死者の生前の善悪を検定し、もし死んだ者の生前の善行が悪より大きいならば、心臓は羽毛と同じ軽さで釣り合い、この時、ミイラは復活することができ死後の世界において永遠の生命を獲得できる。

上述した神話故事の中で、エジプト人的な死の観念が窺える。つまりエジプト人には死は生命の終わりではなく、2度生まれ変わる（オシリスの復活はまさに最もよい事例である）。だから死体を乾燥し保存し、ミイラとして腐敗を防止する。エジプトの偉大なピラミッドとは、パラオがミイラとなってこの世に残り再度復活の時を待つということなのである。

原住民宗教 — マヤ

私たちが称する「マヤ人」とは、アメリカー帯に分布し、3000年以上もの歴史を持っている。およそ、メキシ

コ、グアテマラ、サルバドル、ホンジュラス等は皆大変マヤの遺跡が多い。マヤ人の宗教は原住民的な信仰体系であるが、現在の原住民宗教の大半はその他の宗教文化の影響を受けている。しかし北アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、台湾に至っては、皆まだ原住民宗教的な拠点がある。世界各地の原住民宗教の類型は同じではないが、少し類似する点があり、例えば自然や神への崇拜やトーテム崇拜、祖先崇拜、シャーマニズム等がある。

現代のマヤ人はまだ初期の宗教儀式を行ってはいいるが、マヤ文化的な神秘は消失し、初期のマヤ的宗教精神の大半もまた歴史の中に消えていった。16世紀にスペイン人がアメリカへの移住を開始し、当時の宣教師はマヤ人の信仰のセンターとして教会を建て、わずかにマヤ文明の残る文献は、異端邪説として焼却された。このように侵略者たちはマヤの宗教伝統を脅かしたが、マヤ宗教は全部消失したのではなく、現存するマヤ宗教は、かえってローマカトリック教的精神とトーテムに融けこんで、原住民宗教の旺盛な生命力を表している。

博物館の展示の中に、メキシコのチアパス州高地の祭壇があるが、この祭壇は、当地の伝統的な村落であるツォツィルマヤ族工匠が製作したものであり、かつて当地の司祭が祈願の儀式の中で使用したものである。祭壇の彫刻はマヤ人に固有の宗教的象徴の意味がある。例えば、祭壇の四方には宇宙樹の画像があるが、宇宙樹はマヤ人の伝説では根は下に伸びて地底に入り、木と枝は地球にあって、幹は天空に伸び上がり、供え物を置くテーブルは一對のカラスと亀の形をしており、マヤの創世神話の中のカラスと亀の陸地創造の神話を象徴している。

祭壇の四方の紅、黄、藍、白の色は、四つの違った方角を示し、同時代のマヤ人の主食、つまりトウモロコシの四種類の色を示している。マヤ人の世界観では、重要なことは太陽が昇降する方向—東と西であり、つまり紅は日が昇る東を意味し、藍あるいは黒は日の落ちる西あるいは死を意味している。祭壇上の供え物には、ローマカトリック教会の聖母マリア像・穀物・蠟燭・花束・コーパル香等を置く。燃えるローソクは神々が供え物を享受していることを示し、コーパル香をたくことは生産力を燻煙する儀式であり、これは豊富な多産を意味する香気であって、「神の香煙」の代表でもある。祭事の目的は、神に疾病の治癒や五穀豊穰を希うことであり、あるいは未来を予知すること等である。

注

- 1、宗教教育研究会『宗教を考える教育』教文堂、2010。
- 2、磯岡哲也「国公立学校における『宗教を考える教育』の現状」同上、117頁。
- 3、台湾新北市にある1984年開山された靈鷲山無生道場の創始者。
- 4、「宗博について」世界宗教博物館ホームページより（2016.4.30 日本語版）。
http://www.mwr.org.tw/content_jp/introduction/introduction.aspx
- 5、七階の展示大ホールにある繁体中国語版パンフレットから展示順に訳出した。なお、現在日本語訳がないため、本稿は参観者向けの日本語参考資料としても作成している。